

茨城県山間部農村の地理学的研究

— 久慈郡大子町の例 —

井 田 裕 子

茨城県の山奥といわれその林野率が80%に近い大子町では、早い時代から商品価値の高い工芸作物栽培が行なわれていた。とりわけこんにゃくは、最も古い主産地であり、今日にもその生産の基幹性は受け継がれている。しかし日本の社会、経済活動の動向による農業の変化及び近年の人口流出現象等は必ずしも山間部農村の農業経済に有利に働いたとは考えられない点があり、ここでも現在、農業全体としては衰退の方向にあることが認められる。そこで、その生産上の特性と近年の動向、及び集合的に見た農家の動きをもとに地域の性格を考察しようと試みたのが本論文の主旨である。

水田が畑よりやや広い本町では、稲が生産量では1位、次いで麦類となるが販売額では工芸作物が首位を占めている。しかし地域農業、経済の主幹性を維持しているものの、こんにゃくは他の大産地に比してむしろ伸び悩んでおり、たばこは激減する等伸びを示すものはわずかに小規模経営の茶のみとなっている。これは地域の自然特性を生かした生産物としての地位を確保しているものと考えられ、同様に考えられ伸びているものにりんごがある。一方最近では畜産・酪農・野菜類がやや目立ってきており、都市需要に応える傾向をも持ち始めた地域の性格をのぞかせる。

以上のような農業生産の現状から、歴史的に重要であった工芸作物の占める位置が曖昧になってきていること、しかしなお山間部、丘陵地利用の一環としてその換金性に基づく継持が認められること、さらにきゅうりに見られるようなここ数年における各種新作目の導入とその全国的に見た産地としての不安定性が読みとれる。一方で人口減少地にあり、農家数も減少しており、その動きのパターンを集落カードにより読みとることを試みた。そこでは、大子町では時間的に都市に近い方から流出が進むような印象を得た。

以上の事項と地域の歴史を考えるに、農家による作目選択のしかた、その維持の時間的連続性のパターンは、大きく見た日本経済の動きと重要な結びつきを持つようであるが、しかしなお個人の持つ根本的姿勢、ひいては地域農業者の持つ個性がいかなる背景をもって出現するかということ、そういった大きな疑問符が最後に残されている。

アイルランドの歴史地理的研究

京 戸 友 子

アイルランド島の自然条件は、その生産活動にとってあまり適切かつ有効であるとは言えない。ひどい西岸海洋性気候と氷河作用はこの島に不毛の荒蕪地や泥炭地のひろがり等特色づけた。歴史時代にわたって、ほんの少しの気候変化も農業国アイルランドにとっては重大な事であった。この島は、自然的にも人文的にもブリテン島と深く結びつき、大西洋航路を通して西欧世界の発展に貢献した。

すなわち、この航路を通じてのノルマン人のイギリス、フランス、イタリア侵入であり、中世の自治都市と結びつく商業活動であった。古代、アイルランドは、ローマカトリックとは教会組織の異なる、しかし信仰心・信仰開拓心は驚くほど強いケルト教会なるものが民族を代表していた。国土は多数に分割され、しかし統一発展の可能性ある平和な民族国家であった。北方人の移民が始まり、彼らはアイルランドにさほどの害は与えず、かえって町や港を建設し文化を発達させた。ダブリンを始めとし、州やカンティ制度など当時に基礎を持つものが現在に生かされているのがアイルランドである。その後のイギリスの征服は、政治的、民族的、宗教的、経済的、その他あらゆる方面にわたって植民地的であり、原住民は白人でありながらも搾取され、新天地を求め多くの人間が流出していった。アイルランドの農法は伝統的に穀草式で、放牧地と耕作地の割合は気候条件や社会状況によってその都度変化していった。牛、豚、羊を飼い、えん麦、カブ、大麦をつくり、18世紀以後はバレイショの導入で人々は飢えずにすんだ。荒地開墾とバレイショとで人口は急増し1845年はそのピークであった。1845年からの大飢饉とイギリス本国の無処置が人口を奔流の如く流出させてしまった。人口は母国の将来に見切りをつけたかの如く急減し、そのいたではいまだに治っていない。植民地としての傷は、北部の工業、プロテスタントと南部の農業・カトリックという相対峙する地域性をつくりあげてしまった。そしてこの地域性は、愛国者達の独立運動の際にも常に冷たい壁を見せ、北部のアイスター一部をイギリスに残したままアイルランド共和国をつくりあげることとなったのである。共和国は社会主義的政策をとり入れ、農業を発展促進させると共に、それ一辺倒の経済から脱却しようと努力している。